



監督・原案：アンドレア・モライヨリー
 原作：カリン・フォッスム『見知らぬ男の視線』
 原案・脚本：サンドロ・ペトラリーア
 製作：ニコラ・ジュリアーノ、フランチェスカ・チーマ
 出演：トニ・セルヴィッロ/ヴァレリア・ゴリーノ/アンナ・ボナイウート/オメロ・アントヌッティ/ファブリツィオ・ジフーニ/ネッロ・マーシヤ/マルコ・バリアーニ/アレッシア・ピオヴァン/ジュリア・ミケリーニ/デニス・ファゾーロ/フランコ・ラヴェーラ

みどころ

イタリアのアカデミー賞で史上最多の10冠を独占！エンタメ作品ではなく、手の込んだややこしい心理描写作品がそんな栄冠を勝ち取るのは、さすがルネサンスの国！95分と短い、サンツィオ刑事の捜査を軸とした会話劇は濃密だから、緊張感の維持が不可欠。したがって、ドツと疲れることまちがいないが、複雑な人間心理の解明ができた感動もそれ相応に大きい。さて、そんなしんどいイタリア映画への、あなたの採点は？

■長編初監督作で、いきなり10冠を独占！■

本作の宣伝文句は、「イタリア・アカデミー賞史上最多となる10部門独占」。そしてまた『ニュー・シネマ・パラダイス』(88)、『ライフ・イズ・ビューティフル』(97)に続き、イタリア映画10年に一度の名作がまたひとつ誕生した。世の中には誇大宣伝が多いが、2001年カンヌ国際映画祭でパルム・ドールを受賞したナンニ・モレッティ監督の『息子部屋』(01年)などで長い間助監督をつとめてきたアンドレア・モライヨリー監督が、長編監督デビュー作となった本作で、いきなりイタリア・アカデミー賞と呼ばれるダヴィッド・ディ・ドナテッロ賞で作品賞、監督賞、新人監督賞など主要10部門を独占したのはもちろんホント。ちなみに、『ニュー・シネマ・パラダイス』は同賞で1部門、『ライフ・イズ・ビューティフル』(『シネマルーム1』48頁参照)は8部門を受賞しているらしい。

ここまでではすべてホントだが、「10年に一度の名作」はホント？その評価はあなた自身の目で。

■□■映画はエンタメ？それとも人間心理追求の芸術？■□■

映画はエンタメ！巨額の費用をかけてそれを徹底的に追求しているのが、ハリウッド映画だ。しかし、ルネサンス文化の香りが高いイタリア（？）では、フランスと同じように映画は人間心理の追求のための芸術？日本でもＴＶドラマの延長のような、とことんエンタメ性を追求した作品が多いが、時には小林政広監督の『白夜』（０９年）や園子温監督の『ちゃんと伝える』（０９年）など、フランス映画やイタリア映画並みの（？）人間心理を追求した名作もある。

しかして本作は、ハリウッド映画や近時大ヒットした『レッドクリフ Part Ⅰ、Part Ⅱ』などの対極にある、じっくりと人間心理を追求していく映画。ただ、そんな映画のしんどさにあなたは耐えられる？

■□■人間心理の追求は、やはり人間の力で■□■

大切な息子の死をめぐる家族それぞれの思いが展開された『息子の部屋』の評論で、私は「暗い、しんどい、疲れる…」と書いた（『シネマルーム１』５８頁参照）が、それは本作も同じ。しかし、イタリア映画の名作を楽しむためには、そんな心理戦にチャレンジする気持が必要だ。本作は、湖のほとりで死体となって発見された若く美しい少女アンナ（アレッシア・ピオヴァン）をめぐる、ベテラン刑事サンツィオ（トニ・セルヴィッロ）の捜査を描く物語。その聴き取り捜査が展開していく中で次々と明らかにされていく、関係者たちそれぞれが持つ哀しい秘密とは？

サンツィオ刑事自身を含めて通常は表に出ることのない人間心理のウラの部分を、アンドレア・モライヨリ監督はサンツィオ刑事の捜査を通じて徹底的に解明していく。日本では２００９年８月３日に開始された裁判員裁判第１号の実施と、８月３０日の衆議院議員総選挙による「政権交代」を控えて「取り調べの可視化」が模索されているが、ビデオテープで可視化できるのは人間の表面だけ。人間心理の内面に深く立ち入り、それを暴き出すためには、やはりサンツィオ刑事のような人間技が必要だ。本作を観て、私はそんなことを痛感したが・・・。

■□■それでもボクはやってない！■□■

周防正行監督の『それでもボクはやってない』（０６年）は裁判員裁判実施に向けた格好の教科書だったが、本作で「それでもボクはやってない！」と叫ぶのは、死亡したアンナの恋人ロベルト（デニス・ファゾーロ）。本作におけるサンツィオ刑事のロベルトに対する脅迫的取り調べ（自白の無理強い）は、弁護士の私の目から見ると問題が多い。ネタバレを恐れずに言うと、結局犯人はロベルトでなかったことが明らかになるのだが、それについてのロベルトに対するサンツィオ刑事の謝罪も、これでは到底許されないものだ。したがって、人間心理の追求ドラマとしてみれば本作は秀作だが、殺人事件の捜査のあり方という視点で見れば、サンツィオ刑事は落第？

サンツィオ刑事がロベルトを容疑者だと判断したのは、現場に争った形跡がなく、アンナの表情も穏やかだったため。つまり、そんな状況証拠によってサンツィオ刑事は、この事件は感情が絡んでいる顔見知りの犯行だと推測したわけだ。さらに検死の結果、アンナはある病に侵されていて余命わずかだったこと、アンナは男性経験のない処女だったことが判明したが、そんな事実は犯人捜しと事件の真相解明にどのように関連するの？ 今始まったばかりのサンツィオ刑事の捜査は、前途多難そうだ。



2009/12/5 シネモンド、山形フォーラム、12/19 八戸フォーラム、2010/1/9
盛岡フォーラム、2010/1/23 福島フォーラム ほか全国順次公開
2007 INDIGO FILMS

■□■村人にはこんな秘密が その1 ■□■

殺人事件が起きた北イタリアの小さな村には、ちょっと変わったキャラの村人たちが住んでいたようだ。映画冒頭に登場するのは、小学生の少女マルタが行方不明になったと大騒ぎする物語。結局マルタは母親の注意を無視して、村のはずれに住む知的障害を抱えた男マリオ（フランコ・ラヴェーラ）に誘われて湖に行っていたわけだ。そこでマルタが語る「湖には蛇が住んでいて、それを見ると永久に眠ってしまうの。伝説じゃないわ。今日は本当に蛇が出て魔法をかけたんだもん」との言葉を聞いて不審に思ったサンツィオ刑事が湖に行き行って発見したのが、アンナの死体。マルタとマリオは一体何を見たのだろうか？

マリオの父親（オメロ・アントヌッティ）は現在車椅子生活を余儀なくされているが、知的障害をもつ息子が生まれてきたことについてずっと自分を責めていたため、2人の間には今なお素直な父子関係が形成できていないようだ。そんなマリオから得た供述が、「アンナは村人みんなから愛されていたが、自分の父親だけはアンナを憎んでいた」というもの。これは一体どう解釈すればいいの？ サンツィオ刑事の捜査の結果明らかになる村人の秘密その1は、そんなマリオ父子の姿。

■□■村人にはこんな秘密が その2 ■□■

アンナの家族にもさまざまな秘密があった。まず、姉のシルヴィアはアンナと本当の姉妹ではなく、シルヴィアは父親ダヴィデ（マルコ・バリアーニ）から愛されていないと感じていたい。さらに、アンナを溺愛し、「アンナのことはすべて知っている」と豪語していた父親は、事件を機に明らかになったアンナの病気を知らなかったから、それを聞かされた父親はひどく衝撃を受けることに。父と娘の関係なんて、意外にそんなもの？

■□■村人にはこんな秘密が その3 ■□■

本作では結末近くになってアンジェロのお墓が登場し、アンジェロの死亡秘話（？）がアンナ死亡事件の真相解明に大きく効いてくる。アンジェロとはアンナがベビーシッターをしていた子供の名前で、幼くして不慮の事故で亡くなっただけ。アンジェロの父親（ファブリツィオ・ジフーニ）が妻（ヴァレリア・ゴリーノ）と離婚したのは、その死の重みと悲しみに耐えられなかったためらしいが、もしそうなら、アンジェロの父親にもアンナ殺しの動機があるのでは？

■□■サンツィオ刑事自身にもこんな秘密が ■□■

サンツィオ刑事の捜査が進展する中、村人たちが抱えている秘密が次々と明らかにされていくが、実はサンツィオ刑事自身にも大きな秘密があった。『私の頭の中の消しゴム』（04年）や『明日の記憶』（06年）は若年性認知症をテーマとした映画だった（『シネマルーム9』137頁、『シネマルーム10』172頁参照）が、実はサンツィオ刑事の妻（アンナ・ボナイート）もそれ。サンツィオ刑事はそんな妻の姿を一人娘のフランチェスカ（ジュリア・ミケリーニ）に見せられないという人知れない悩みを抱えていたわけだ。

映画のラストでは、施設を訪れた父娘の前を、今は夫の顔すら完全に忘れてしまったサンツィオ刑事の妻がなぜか少し微笑みながら通りすぎていくシーンが登場する。これは一体何を意味するの？ アンナ殺害事件解明のためには、そんなサンツィオ刑事自身の心の奥にもしかり迫っていかなくちゃ。

2009（平成21）年8月14日記